

令和四年度 入学式 式辞（山村学園短期大学）

新入生の皆さん、入学おめでとう。

バスベイには鮮やかなコバルトブルーの花、オオイヌノフグリが、葉と花が同時に芽生えるヤマザクラも咲き始め、足元には黄色の花のレンギョウ、紫色のスマレがキャンパスのあちこちに咲いている本学

本日は、学校法人山村学園より岡理事長、山村寛前理事長、山村正巳まさき本部長にご臨席をいただいております。

式にあたり「原体験」についてお話します。

体験とは「触覚」「嗅覚」「味覚」を基本とし、「視覚」「聴覚」を含めた五感（五官）を重視した「直接体験」のことです。かつて原体験は、幼児から小学校にかけての時期に遊びの中で自然に体験していました。自然の中で遊び、ふれあいを通じて育まれる思考力、判断力、表現力等が人間としての「生きる力」となっています。

実物に触れながら実際に行う「直接体験」は、いつの時代でも子どもだけでなく、大人にとっても極めて重要です。特に子どものあるところに行う「直接体験」は、知恵となり「生きる力」となって普段の生活に生かされます。今まで教育としてではなく、子どもの自主的な活動や遊びとして行われてきた原体験、自然とのふれあう機会の減少等に伴って、都市部・農村部に関係なく減ってきているのが現状です。現在の子どもたちは、学校の教科書からの知識、テレビやインターネットからの情報等の「間接体験」による知識は身に付いていますが、「直接体験」は絶対的に不足しているのです。

そのため触ったり、嗅いだり、味わったりする活動を伴う「直接体験」が現代の子どもに特に必要と考えます。

原体験は自然物を素材とする体験です。 人工的な施設より、土があ

り、雑草が生え、いろいろな生き物の住む自然の場所が適しています。

多くのことを教えるのではなく、その場所で子どもたちが自らの興味・関心によって、五感を通し、直接自然を体験することに意味があります。気軽に出かけ、自然物に触れ、嗅ぎ、食べるといったことを、遊びを通して体験することが原体験の基本です。指導者は一つの知識を教えるのではなく、子どもの興味・関心をふくらませるような指導が大切です。子どもに旺盛な好奇心さえ持たせれば、特別な指導は必要ないといえるでしょう。原体験をするには、過保護、過干渉を避け、多少の危険は伴っても子どもたちの自由な行動を見守ることが大切であるといえます。

本学の学生にアリ、クモ、トンボの絵を描かせてみると、「トンボに足があったの」と驚くべき発言、いかに幼い頃、昆虫採集の体験が不足していたかが伺えます。親も積極的に体験を積ませることが重要なのです。

さて、保護者の皆様に一言ご挨拶を申し上げます。ご入学、本当におめでとうございます。

作年度もコロナウイルス感染拡大に明け暮れた年でした。

学園祭を始め、クリスマス会等、数々の行事が中止や縮小となりました。しかし、本学では他大学では延々と遠隔授業が展開される中、三密を避け、消毒や換気に十分配慮しながら対面授業をメインとして実施してきました。

本年もそれを基本として実施してまいります。

新入生の皆さん、「**さいたま景観賞**」を受賞した、緑あふれるこのキャンパスを愛し、入学して良かったと思える学園生活を、先輩と一緒に頑張って創ってくれること、そして本短大の校歌にも歌われている「**友よ やまむら**」にあるように、人生にとってかけがえのない友をつくってください。

コロナ感染がいまだ収まらない中、このように入学式ができる喜びを胸に、先ほどお話しした「**原体験**」の意味を理解し、**実物**に触れることのできる、本学の自然豊かな「森の学園」での二年間で**感性を磨き、保育の心を十分に育んでいく**中で、**光り輝く自分を発見していく**ことを期待し、式辞といたします。

令和四年四月一日

学校法人 山村学園短期大学 学長 野口一夫